

2016 年度
神奈川大学・ブリティッシュコロンビア大学 (UBC)
共催シンポジウム

非文字資料と日本学・アジア学研究の新しい可能性に向けて

日 時：2016 年 7 月 23 日 (土)
9:15 ~ 17:00
会 場：Room 120, C. K. Choi Building
(ブリティッシュコロンビア大学)
共 催：神奈川大学非文字資料研究センター
ブリティッシュコロンビア大学 (UBC)



SPONSORED BY KANAGAWA UNIVERSITY,
UBC ASIAN STUDIES DEPARTMENT AND CENTRE
FOR JAPANESE RESEARCH, AND THE AKS LAB KOREAN STUDIES

神奈川大学非文字資料研究センターと UBC
共催シンポジウム「非文字資料と日本学・ア
ジア学研究の新しい可能性に向けて—Non-
written Materials for New Possibilities
of Japanese/Asian studies」の報告

非文字資料研究センター長・内田青蔵

神奈川大学と UBC の交流の始まり

2016 年 7 月 23・24 日の両日、「非文字資料と日本学・アジア学研究の新しい可能性に向けて」というテーマで、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学 (UBC) を会場に、本非文字資料研究センターと UBC の Asian Studies department and Centre for Japanese Research, and the AKS Lab Korean Studies による共催シンポジウムが行われた。神奈川大学と UBC は、2004 年から 2007 年の COE 時代に若手研究者のための研究交流を開始し、互いに 2 名ずつの派遣事業を実施した。以後、COE の事業を継承して設立された非文字資料研究センターとなった現在もその交流は続き、2008 ~ 2015 年の間に本学からは 5 名、UBC から 5 名の若手研究者がそれぞれ派遣されてきた。このように本センターと UBC は若手研究者の派遣事業を通して、極めて活発な事業を行ってきた実績がある。こうした実績を積み重ねることができたのは、UBC で積極的にこ

の若手研究者遣事業の担当をされているホ・ナムリン (許南麟) 教授が、かつて本学の日本常民文化研究所に客員研究員として 1 年間在籍した経験があり、それゆえ、本学の日本常民文化研究所、ならびに、非文字資料研究センターの良き理解者であることに尽きるといえるであろう。

そのホ・ナムリン先生が、1 年前の 2015 年、本学に表敬訪問された。その際、これまでの活発な若手研究者の派遣事業のご協力のお礼を述べるとともに、今後の若手研究者の派遣にとどまらず教員同士の派遣事業へと発展させるための礎となるシンポジウムを共催できないかと相談した結果、翌年に UBC で共催シンポジウムを開催する約束を得たのである。今回のシンポジウムはその約束を具現化したものであった。

シンポジウムについて

シンポジウムは、非文字資料研究センターと UBC のこれまでの若手研究者たちの研究テーマや教員側の関心事から「非文字資料と日本学・アジア学研究の新しい可能性に向けて」というテーマとした。そして、非文字資料研究センター長と日本常民文化研究所長の招待の通知と、シンポジウムのために非文字資料研究センターの研究員を中心に本学からもテーマにふさわしい研究

発表者を選出することを依頼され、最終的には本学関係者は7名参加することとなった。

さて、シンポジウムは7月23日、UBCのキャンパス（図1）の一郭にあるアジアセンター・C.K.Choi Building（図2）の120番教室を会場として9:30から開催された。最初にUBCのホ・ナムリン教授が開催の挨拶を行い、その後、非文字資料研究センター長の内田青蔵（本学建築学科教授）と常民文化研究所長の田上繁（本学経済学部教授）が簡単な挨拶を行った（図3）。ちなみに、内田は、非文字資料研究センターの設立経緯、近年の非文字資料研究センターの研究体制とその研究業績の紹介、UBCと本学の若手研究者の派遣事業の実績、そして、最後に非文字資料研究の今後の可能性について簡単に報告し、挨拶とした。



図1 緑豊かなUBCキャンパス



図2 シンポの会場となった C.K.Choi Building



図3 UBC 許先生

互いの開催の挨拶を終え、各研究者の研究発表に移った。そのプログラムは、以下の通りである。

午前：10:00～12:00

報告1 窪田涼子（神奈川大学日本常民文化研究所）
「絵引」という発想—日本常民生活絵引はどのようにつくられたか？

報告2 富澤達三（松戸市立博物館 非文字資料研究センター客員研究員）
「絵引」プロジェクトの復活—近世図像を読み解く—

報告3 パク・スチョル（朴秀哲）（ソウル大学東洋史学科教授 UBC研究員）
後醍醐天皇画像にみられる「異形」と織田信長

報告4 佐野賢治（神奈川大学歴史民俗資料学研究科 非文字資料研究センター研究員）
“もののけ姫”から見た日本文化—草木国土悉皆成仏—

<昼食>：12:00～13:30

午後1：13:30～15:30

報告5 ジェームズ・ウェルカー（神奈川大学外国語学部）
少女漫画に描かれた日本のジェンダー史

報告6 安田常雄（神奈川大学歴史民俗資料学研究科 非文字資料研究センター研究員）
戦時下日本の紙芝居と植民地

報告7 ソ・ジョン（徐智瑛）（UBC研究員）
伝統美の近代的布置：1930年代朝鮮における地域文化アイコンとしての妓女

報告8 大川栄至（UBC研究員）
山・境界と空間—中世高野山の御影堂

< Coffee break > 15:30～16:00

午後2：16:00～17:30

報告9 ホ・ナムリン（許南麟）（UBC教授）
美のディアスポラ：日本で高く評価された朝鮮陶磁器

<結論 Conclusion>

各発表は、報告20分、質疑応答10分という形式で進められた。それぞれ発表には熱が入り、発表自体が30分を超えるものも多かったが、非文字資料を用いた研究発表という観点から見れば、極めて興味深いものばかりであった。すなわち、やや乱暴だが簡潔に紹介すれば、



窪田・富澤先生は非文字資料研究センターの中核をなす「絵引」事業に関する報告であった。ソウル大学のパク・スチョル（朴秀哲）教授の報告も後醍醐天皇画像を対象としたものであり、また、本学の佐野先生、ウェルカー先生、安田先生も共通しているのはアニメ・漫画・紙芝居というように描かれた画像を対象としたり、あるいはそうした図像資料を起点とした研究であった。同様に、UBCのソ・ジョン（徐智瑛）氏は妓女という対象の役割やその役割の歴史的意味、大川氏は御影堂という建物、そして最後のホ・ナムリン教授は朝鮮陶磁器を対象に日本と朝鮮におけるその価値解釈の差異について論じたものであった。参加者は、UBCに在籍する東アジア研究の研究者や大学院生、日本人留学生、あるいは、サバティカルでUBCに滞在していた研究者など多岐にわたり、＜まとめ＞においても非文字資料による研究の可能性に対する質疑応答が行われた。言い換えれば、本シンポジウムはまさに非文字資料を起点とした多様な研究方法とその成果の発表の場として、本学非文字資料研究センターの存在を示すことができ、また、非文字資料研究による研究の魅力とその可能性を発信する場となったといえる。

UBC 施設の見学及びバンクーバーツアー

2日目は、ホ・ナムリン教授のご案内で、午前中はUBCの附属施設として世界的にも屈指の先住民民族資料を収集展示しているUBC人類学博物館（MOA）ならびにビクトリアで亡くなった新渡戸稲造を偲んで造られたといわれる新渡戸記念庭園の見学会を行った（図4）。午後は、1880年代から日本人も多く移住し日本人街もあった港町スティーブストン（Steveston）を訪れ、当時の記念館となるジョージア湾缶詰工場（図5）を見学した。その後、バンクーバーのダウンタウンに移動し、チャイナタウンやギヤスタウンなどを中心に街歩きを



図4 MOA 内部

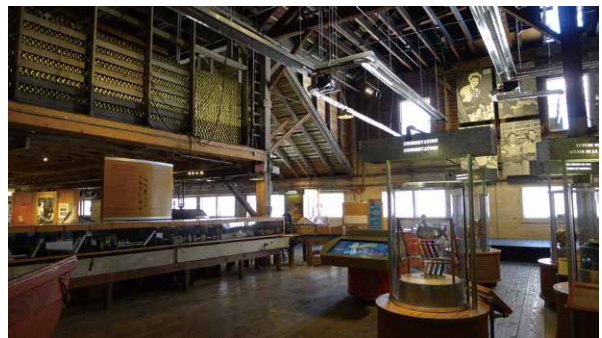


図5 缶詰工場内部

行った。夕方は、クイーン・エリザベス公園の中にあるレストランで食事を行い、神奈川大学とUBCの共催シンポジウムをお開きとした。

7月22日～26日の3泊5日という極めて強行軍の日程であったが、中身の濃い2日間のシンポジウムであった。充実した2日間を過ごせたのもUBC教授のホ・ナムリン教授の綿密な計画と親身なお世話によるものであった。ここに記して感謝を示したい。そしてまた、教員間の研究交流の場として、数年後には本学とUBCとの共催シンポジウムを、今度は本学を会場に開催したいと考えていることを記しておきたい。

バンクーバー断章

参加された先生方は26日に帰国されたが、筆者だけは2日間延泊し、28日に帰国した。筆者にとってバンクーバー訪問は初めてのことであり、筆者の専門分野である建築分野の視点から見たい街や建築があったことからこの機会を有効に活用しようと考えたのである。

改めて指摘するまでもなくバンクーバーは、わが国への木材輸出地として知られている。近年、わが国では、木造文化圏であることへの再評価や木造建築の性能評価による法規制の改定などもあって、伝統的な木造建築の見直しとともに木造建築の可能性が飛躍的に拡大化されてきたが、このUBCのキャンパスを見ても新しい建築には木造が採用されており、それまでの鉄骨造や鉄筋コンクリート構造に代わって、伝統的な木造を積極的に採用した建築へと大きく転換しつつある雰囲気が伝わってくる（写真6, 7）。

さて、筆者が延泊してまで実地調査したかったのは、バンクーバーの歴史的建築物としてどのような建築が保存されているのかの確認である。とりわけ、実地調査したかったのがパークレー・ヘリテージ公園とその中にミュージアムとして保存されているローディ・ハウスで



図6 建設中の木造高層建築



図7 バス停



図8 ローディ邸



図9 食堂部分

あった（図8）。このローディ・ハウスは、1893年に建設されたクイーン・アン様式の住宅で、ビクトリア時代後期の生活の様子を現在に伝える貴重な住宅遺産である。施主のギュスタフ・ローディとその妻は、1886年にバンクーバーで初めての印刷・製本事業を開始し、その成功により建築家フランシス・ロッテンベルグに依頼してこの住宅を完成した。この住宅は、1970年代後半からバンクーバー市が保護することとなり、建物修理や周辺の公園整備を行い、1990年からバンクーバーで初めてのハウス・ミュージアムとして現在も公開されている。ミュージアムといっても、珍しいものを展示するのではなく、竣工時のビクトリア後期時代のインテリアや生活を再現しているもので、まさに時代を超えた100年前の生活そのものを展示しているのである（図9）。また、周辺には、この住宅だけではなく、他の8件の住宅が同様に保護され、バンクーバーの開発当初の住宅地の様子を伝えているのである。

いずれにせよ、このローディ・ハウスに行くまでの間にも、バンクーバー市が定めた建築遺産「CITY OF VANCOUVER HERITAGE BUILDING」と記されたプレートが付いた建物が散見された（図10）。ほんの短い

時間の現地調査であったが、こうした存在から歴史性や文化性を大切にしようとする市の姿勢が見て取れた。

いずれにせよ、シンポジウムの2日間と延泊した2日間のバンクーバー滞在は、誠に充実した時間であった。もう一度、訪れたい、それが現在の正直な心情であり、こうした機会を与えてくれたホ・ナムリン教授に改めて感謝申し上げたい。

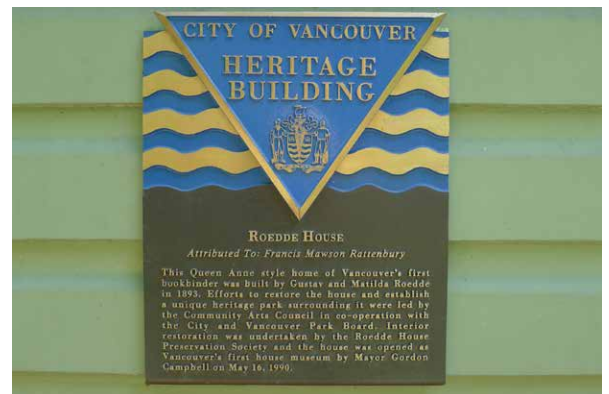


図10 ローディ邸の建築遺産プレート



「日本常民生活絵引」はなぜつくられたか—合同シンポジウムに参加して

神奈川大学日本常民文化研究所 窪田 涼子

はじめに

現在、非文字資料研究センターにおいて多様に展開し推進されている「絵引」研究は、もともと日本常民文化研究所¹の主宰者であった渋谷敏三の発想によりつくられた『絵巻物による日本常民生活絵引』（全5巻、初版1964年角川書店発行）という本が端緒となっている。そこで今回の合同シンポジウムでは、その『絵引』というものが、渋谷敏三のどのような発想のもとにつくられたかを紹介することとした²。本稿は、当日のシンポジウムでの報告内容をまとめたものである。

絵引原画と絵巻物

『絵引』という本は、絵巻物を基本資料として、そこに描かれた中世の常民（普通の人びと）の生活を抽出・集成し、捉えようとした一種の辞書である。具体的には、絵巻物のテーマを表す合戦、高僧伝などに関する絵ではなくて、むしろ背景として描かれている当時のさまざまな民俗的な事象・事象一たとえば服装、髪型、履き物、物の運搬方法、洗濯の仕方、台所の様子などを、絵巻物から模写の方法で「抜き描き」し、そこにひとつひとつ番号を付し、名称を与え、索引をつけ、字引³のように絵を引けるようにする、という方法である。つまり絵巻物の場面に単純に番号を振り解説をくわえたのではなく、絵巻物から民俗的事象・事象のみを切り取り再編集するというを行っている。そのため『絵引』の原画は、ひとつひとつの事象が、およそ30×40cmの和紙に墨の濃淡のみで精巧に描かれたものとなっている。

一方周知のとおり、絵巻物とは、12世紀～13世紀を最盛期として日本で独特に発達した絵画形式である。芯に木や竹などでできた軸を用い、そこに長さ10メートルほどの紙あるいは絹地を巻きつけた巻子（巻物）という装丁で、その長大な画面に「詞書」とそれに対応する「絵」を交互に配置し、「右→左」へと物語が進んでいく。彩色されたものがほとんどで戦記、社寺縁起、高僧伝記などをテーマとし、1巻で完結している作品と複数巻で完結する作品がある。

つまり『絵引』は絵巻物を基礎資料にしているが、決して絵巻物の注釈書ではなく、あくまで絵巻物は“素材”である。ではなぜ渋谷は『絵引』をつくろうとしたのだろうか。



図1 『絵巻物による日本常民生活絵引』のページ構成



図2 『絵引』原画



図3 アチック・ミュージアムの全景と民具保存状態（『民具蒐集調査要目』より）



図4 『民具蒐集調査要目』より

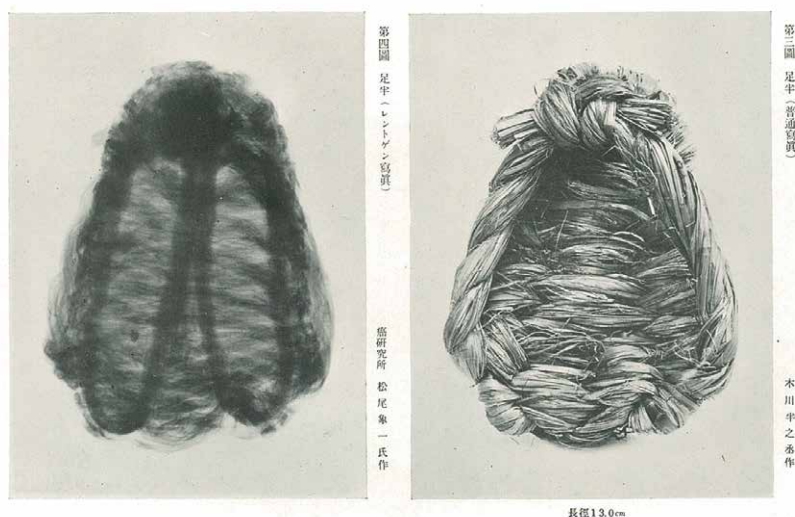


図6 足半のレントゲン写真（『民具蒐集調査要目』より）

民具研究と「絵引」

1930 年ごろから渋沢とアチック・ミュージアム（のちの日本常民文化研究所）では民具（常民生活資料）の収集を開始した。最初の民具収集の手引書である『蒐集物目安』において、「庶民生活を中心とする文化史の研究」のひとつとしての民具の収集と研究の意義を提唱し、ついで 1936 年刊の『民具蒐集調査要目』では、常民の生活文化を研究することを大きな目標としてより明確化させ、さらに詳細な常民生活資料（民具）収集の項目をまとめている。そして 1934 年ごろからは足半^{あしなか}という草履に焦点を絞った収集・整理の共同研究も開始された。そこでは計測調査はもちろんのこと、内部構造を知るた

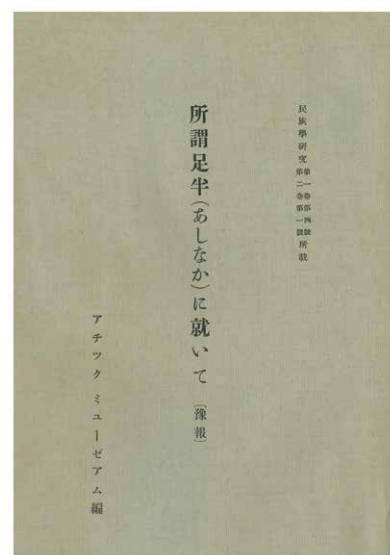


図5 『所謂足半（あしなか）に就いて（豫報）』

めの足半のレントゲン撮影、鼻緒の結び方の体系化、方言調査、使用方法調査など、足半という小さな草履を多角的な視点で調査・分析する方法が採用された。

その共同研究成果『所謂足半（あしなか）に就いて（豫報）』⁴のなかで宮本馨太郎は、明治以前の製作になる絵画史料や文献から足半を洗い出し、「足半文献一覧表・足半絵画一覧表」をまとめ、「足半草履の史的研究」という一章を書き上げている。宮本は、足半という常民が使う生活用品に関して、その歴史的変遷を知るために絵巻物を渉猟し、そのなかに見る足半着用の状態をまとめ上げ

た。これは民具研究において絵画資料、とくに絵巻物が非常に有効な資料になることを明らかにした最初の仕事といえる。渋沢の『絵引』発想の源泉は、この宮本の足半に関する仕事にあったものとする。

「絵引」の特徴～模写と抜き描き

『所謂足半（あしなか）に就いて（豫報）』の発刊から5年ほど経ったころ、渋沢は講演⁵のなかで、絵巻物の中から貴族・僧侶・武家の文化を取り去れば、当時の常民の生活記録のみが残り、現代の民具にあつてよくわからないものの回答が絵巻物から得られること、また絵巻物に民具や動作などをみることは事物のクロノロジーを定めるのに有効であることを述べ、このような「絵を



引く」ものをつくっておけば、民俗学や経済史研究の上で役立つものになるであろうと述べている。

『絵引』の特徴のひとつは、絵巻物の物語の流れとは無関係に、そこに描かれたものを「事物」という要素に分解したところにある。渋沢の関心は、絵巻物に描かれた高僧の生涯でも合戦の様子でもなく、その絵巻物の主要なテーマの周辺に描き込まれた「常民の暮らし」にあった。

たとえば14世紀に成立した〈石山寺縁起 巻三〉の貴族の娘が石山寺へ参詣する場面を例に取れば、ストーリーの中心人物であり画面中央に描かれている主人公の貴族の娘について『絵引』では目もくれず、その周囲に描かれた、「米俵を運ぶ人々の服装や履き物」や「荷物の運び方」に注目し、そちらの姿を「抜き描」いて『絵引』に採用している。

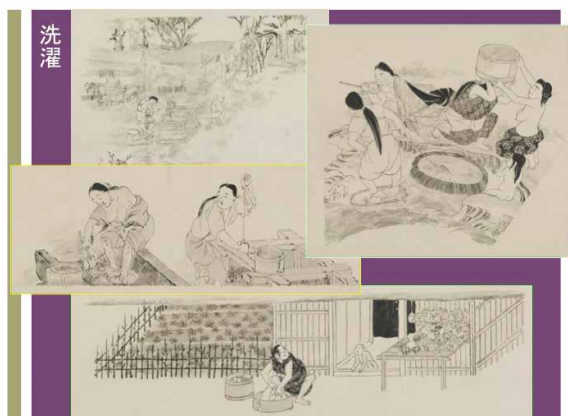


図7 『絵引』より「洗濯」

このようにして『絵引』では、多くの絵巻物からも同様の方法で中世の「常民の暮らし」を集積した。渋沢の目的は単なる絵巻物に記された事物の絵解きなのではなく、常民生活の chronology 構築という、常民生活研究のためのツールをつくることであったといえよう。

おわりに

以上が、今回私が、神奈川大学・U B C共催シンポジウム“非文字資料と日本学・アジア学研究の新しい可能性に向けて”において行った報告の概要である。

おわりに許南麟教授と常民文化研究所と長い交流について記したい。許教授は1997、8年ごろに、当時常民研所員であった故宮田登教授を指導教員として、1年間神奈川大学での留学生活を送られていたことがあった。日本近世の仏教史を専攻されている許教授はこの留

学期間中、研究所の書庫にこもり必要文献を探索しては閲覧し複写をとるという毎日を送られ、当時のどの所員よりも頻繁に研究所に顔を出され、さまざまな研究会や史料調査にも積極的に参加されていた。またたいへん気さくな許先生は、当時の大学院生や研究員、職員などが参加できるような成田山新勝寺関係史料の購読勉強会まで企画してくださった。そのようななかで、私にとり強く印象に残ったのは、勉強会後の懇談会で話された、本来的な仏教のあり方と大きく異なった日本仏教の特殊性についてのお話であり、これは現在も私にとっての課題のひとつともなっている。その後も来日されるたびに研究所に寄ってくださり、いろいろな形で交流が現在までも続いている。

私の報告はまことに拙いものであったが、このような機会を与えていただいた許南麟教授、U B Cのスタッフ

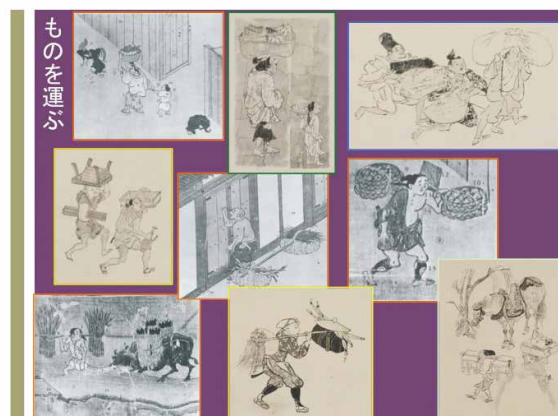


図8 『絵引』より「ものを運ぶ」

の方々、同行した神奈川大の先生方、非文字資料センター職員の皆さまに心から感謝の意を表して擲筆したい。

- 1 日本常民文化研究所は、渋沢敏三により1921年に“アチック・ミュージアム”として発足し、1942年ごろに“日本常民文化研究所”と改称した。
- 2 『絵引』の成り立ちについては、拙稿『『絵引』成立過程についての一考察(1)』(『歴史と民族15』平凡社1999)でも触れている。
- 3 漢字を集めて、あらかじめきめられた一定の順序に並べ、その発音・意味などを説明した書物。字書。字典。なお「絵引」という用語は、字を引く「字引」になぞらえて、絵を引くから「絵引」であるとした、渋沢の造語である。
- 4 『所謂足半(あしなか)に就いて(豫報)』アチック・ミュージアム編、1936年。
- 5 「所感:昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十一回大会にて」『渋沢敏三著作集 第1巻』(平凡社 1992年)所収。

アニメのなかの生と性、暴力、そして死

松戸市立博物館 富澤達三

はじめに

2016年7月23-24日にバンクーバーのブリティッシュコロンビア大学で行われた、同大学と神奈川大学とのシンポジウム「非文字資料と日本学・アジア学研究の新しい可能性に向けて」(“Non-written Materials for New Possibilities of Japanese/Asian studies”)では、個人的にはJames Welker氏の“Writing Japanese Gender History Via Shōjo Manga”(邦題「少女マンガに描かれた日本のジェンダー史」)が、興味深かった。Welker氏の発表は、高島華宵の抒情画、手塚治虫「リボンの騎士」の登場、萩尾望都や竹宮恵子たち「昭和24年組」の少女マンガ家の台頭など、「少女もの」の流れを押さえ、性愛(特に男性同性愛)の世界にも踏み込み、少女マンガから日本のジェンダー史を考察したものであった。マンガやアニメなどのサブカルチャーは、日本史学・民俗学では正面から取り扱われることが少ない分野だが、資料から個別具体的な研究が可能であり、社会学では扱われることが多い分野である。

筆者(富澤)の院生時代の1990年代、文化人類学や社会学の分野で、日本のマンガ・アニメを真正面から研究対象とする欧米研究者がフィールドワークを開始していた。欧米から日本にきた女性のジェンダー史研究者に「日本にはなぜ、少女マンガ/少年マンガと、厳然たる差があるのか」と問われ、「日本のように、女性マンガ家が存在すること自体、世界的に見ると珍しい」と逆に教えられた。現在ではアジア・欧米の社会学・文化人類学の研究者が日本へ留学し、マンガ・アニメ・ゲームなどの、いわゆる「クールジャパン」の文化研究を行うことは、珍しくない。

1、戦後日本のマンガとアニメ

戦後、日本の漫画文化は「子供マンガ」を中心に驚異的に発展し、日本独自の出版文化を形成する。戦前期から日本最大の出版社であった講談社は、子供向け雑誌の読み物として物語マンガを育て、戦前には「のらくろ」などの人気作品を生む。講談社は戦後も子供向け読み物としてのマンガに力を入れ、1959年には週刊マンガ雑誌『週刊少年マガジン』を創刊する。

戦後子供マンガの中心にいたのは、いうまでもなく手塚治虫(1928-89)であった。1965年に『週刊少年マガジン』編集部は、人気絶頂の手塚とトラブルを起こし、

同誌は窮地に陥る。そこで、マガジン編集部は、大阪で盛り上がっていた貸本劇画を導入し、梶原一騎を原作者とした「巨人の星」(1966-71)を大ヒットさせる。小説家志望であった梶原は、少年マンガに教養小説的な濃密なドラマを盛り込み「あしたのジョー」(1967-73)など、スポーツ根性もの(スポ根もの)を大成功に導いた。少年少女向けの子供マンガ文化は、青年・大人向け作品をも創り出して、世界に類を見ない巨大市場と豊饒な物語世界を生み出す。マンガ文化は今なお日本のサブカルチャーの中心的位置にある。

雑誌の人気マンガはテレビアニメとなり、やはり大人気となった。アニメーションは、なんといっても米国のウォルトディズニー社が、世界最高水準の作品を作り続けている。ディズニーのアニメは、世界初の長編カラーアニメ映画「白雪姫」や、「シンデレラ」「ピノキオ」「くまのプーさん」など、世界各地の童話や児童文学を原作とする劇場映画作品と、ミッキーマウスやドナルドダックなどの自社キャラクターによる、テレビ向けのドタバタ劇が人気である。日本のアニメも当初は東映動画(現、東映アニメーション)が、東洋のディズニーを目指して劇場用の長編を制作したが、次第にテレビアニメ中心となっていく。

手塚治虫はディズニーアニメの熱烈なファンで、アニメ制作の夢を持っていた。東映動画作品に協力した手塚は、アニメ制作のノウハウを学んだのち、虫プロダクションを設立、1963年に日本初のテレビアニメ「鉄腕アトム」を世に出す。雑誌に多数の連載作品を持っていた手塚は、自作を続々とテレビアニメ化し、多くのキャラクター商品を発売して商業的にも大成功した。このようにして、日本独自の現象である、雑誌マンガとアニメの密接な関係が生まれていったのである。

書物であるマンガは、セリフや書き文字が日本語であること、日本独自のページ進行やコマ割りなどによって外国人には読みにくい。映像であるアニメは、現地語への吹替や字幕入りとすることで、かなりの部分を理解することができる。以下、本エッセイでは、主にアニメを事例に記述していく。

2、日本アニメの濃密な世界

現在、日本の雑誌マンガのヒット作品は、連載の長期化が著しく、5年10年と続く作品は珍しくない。マンガ界の競争は過酷であり、出版社やマンガ家が一本のヒット作品に全エネルギーを投入し、長期連載とする堅



実な方針は理解できる。しかしながら、あまりにも冗長な物語では作品のメッセージ性が希薄になってしまう。現代視覚文化のトップランナーである映画は、濃密なメッセージを込めた2時間前後の物語を、映像と音楽で見せる芸術であり、繰り返し見ることができる。しかし数十巻のマンガ作品は、繰り返し読むことは容易ではない。テレビアニメでも雑誌の人気マンガを長期間放映するが、大概の場合、雑誌連載分を消化してしまい、未完となることが多い。「傑作」と称されるテレビアニメ作品は、オリジナルストーリーで、半年（全26話）程度の、短くまとまり視聴しやすい作品である。また、オリジナルの物語を作ることは難しく、世界各地の有名な童話・神話や伝説、児童文学などに基づく「名作もの」が、劇場映画やテレビアニメとなり、好評を博すことも多い。

前述の通り、日本では雑誌の人気マンガがテレビアニメ化される状況がある。このなかで日本のアニメは、ディズニーが描かない独自の世界を開拓し、対象年齢も上がっていった。主要なジャンルをいくつかを挙げてみたい。

①ロボットもの

日本のテレビアニメ第1号「鉄腕アトム」は、心を持つ人型ロボットが主人公で、今も国民的人気の「ドラえもん」もこの路線にある。アトムにやや遅れ、リモコン操縦の巨大ロボットが活躍する「鉄人28号」も放映される。1970年代には搭乗型の「マジンガーZ」が登場、少年少女がロボットに乗り活躍する作品が、日本独自のジャンルとして定着する。上記4作品は雑誌マンガを原作としたが、ロボットアニメはオリジナルの物語が多く、「機動戦士ガンダム」（1979）、「新世紀エヴァンゲリオン」（1995）など、定期的に傑作が生まれ、日本が誇るジャンルとなった。ロボットアニメの影響で、日本は突出してロボット研究が盛んだといわれる。

②スポ根もの

『週刊少年マガジン』の人気作品「巨人の星」のテレビアニメは1968年に始まるが、制作は難航した。野球の俊敏な動きをアニメ化することは、当時の技術では極めて困難だった。しかし、力量のあるアニメーターの努力とトレスマシンの導入などの技術的進歩でアニメ版「巨人の星」は大成功し、繰り返し再放送されて昭和期を代表する国民的人気作となる。以後、野球・バレーボール・ボクシングなどのスポーツ競技を通じ、主人公の「努

力・成長・勝利と敗北・ライバルとの闘いや共闘」を描く「スポーツ根性もの」（スポ根もの）が、梶原一騎作品を中心に雑誌マンガの人気ジャンルとなり、次々にテレビアニメ化される。格闘技を描いたスポ根作品では、迫力を出すため雑誌以上の殴打や流血、ついには死に至る暴力表現すら見られた。激しい暴力描写はディズニーは決して使わない、日本のアニメ独自のものである。

③魔女っ子もの

アメリカのテレビドラマ「奥様は魔女」（1964-72）の影響を受けた「魔法使いサリー」（1966-68）以後、魔法や超能力・サイボーグ化などで、超人的能力を持った少女が活躍するジャンルである。1980年代に、異星人の美少女を主人公としたラブコメ（＝ロマンティックコメディ）作品「うる星やつら」がテレビアニメ化される（1981-86）。同作は、ハイティーン向けの作品で、作画技術や演出で高い完成度となり、「美少女もの」としても画期的作品となった。

「美少女戦士セーラームーン」（1992-97）は「戦闘美少女」のジャンルを確立した。アメリカでは「ワンダーウーマン」に代表される、「筋骨隆々の、自立した大人の女性」が活躍する作品がある。一方、日本の魔女っ子ものでは、主人公は視聴者の年齢に合わせ十代前半の少女であり、儚げでありつつ性的魅力を持つ存在である。

3、オタクからクリエイターへ

緻密なメカニック設定で濃密なドラマを描いたSF作品、「宇宙戦艦ヤマト」の劇場用映画（1977）が画期となり、「子供が見るもの」であったアニメは、10代後半以降の若者へとファン層を拡大した。日本で「アニメーション（アニメ）」の語が定着したのも「ヤマト」以降である。続編の「さらば宇宙戦艦ヤマト 愛の戦士たち」（1978）は2時間半ものオリジナル劇場用映画となり、敵宇宙人との熾烈な戦闘のなかで登場人物が次々と戦死し、クライマックスでは圧倒的な敵の力の前、万策尽きた主人公が満身創痍のヤマトで特攻する。この衝撃的な内容に賛否両論が出たが、興行的には空前の大成功を収め、濃密なドラマは「人間にとって、愛こそが最も大切である」との、安直だが明解なテーマを貫いた。

基本的に「子供が見るもの」であった、マンガやアニメ・特撮作品に耽溺する若者が増えるなか、彼らを「おたく」（のちに社会的に認知され、カタカナ表記となる）と命名し、揶揄したのはコラムニストの中森明夫

(1959-)である¹。1989年7月に「東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件」が発覚すると、犯人の外見・生活態度がオタク的なものであったことで、オタク男性やマンガやアニメ、そのものへバッシングが起こる。なお、オタクは男性に限ったことでなく、女性にも見られた。『週刊少年ジャンプ』の人気作品「キャプテン翼」(1981-88)のサッカー少年たちを題材とした同性愛的な「やおい」(話が「ヤマなし、オチなし、意味なし」の意)の二次創作は、女性同人誌作家によりコミックマーケットや同人誌即売イベントなどで、女性読者を獲得した。現在は、美青年の同性愛を娯楽的に扱うBL(ボーイズラブ)の分野が小説・マンガなどで成立し、フェミニズムの視点から学術的考察が行われている²。

一方、1980年代の日本アニメ界では、宮崎駿(1941-)が「風の谷のナウシカ」(1984)で一躍名を馳せた。「ナウシカ」を観た手塚治虫は、完成度の高さとメッセージ性に愕然とし、「ナウシカ」に関し何も語らなかった、とのエピソードは有名である。宮崎はアニメ業界内では質の高い作品を作る実力者として知られており、「ナウシカ」以降、作家性と娯楽性を両立させ、かつアニメの原点である「動き」にこだわった映像で、傑作を連発する。また、多くの宮崎作品では西欧の世界が舞台であったが、「となりのトトロ」(1988)以降は日本を描いて成功し、国民的なアニメ監督となって現在に至る。宮崎は「アニメは子供のもの」と考え、オタクには批判的であった。また、宮崎と年代で「機動戦士ガンダム」シリーズなどロボットアニメの鬼才である富野由悠季も、宮崎以上にオタクには辛辣である。

1990年代中期になると「新世紀エヴァンゲリオン」(1995-96)が登場し、魅力的なキャラクター、搭乗型ロボットのエヴァンゲリオンをはじめとする緻密なメカニック描写での圧倒的ビジュアル、数々の凝った楽曲、そして謎を秘めたストーリー展開で、大ヒットした。監督の庵野秀明(1960-)は、アニメ・マンガ・特撮など、昭和期の視覚文化を享受した、自他ともに認めるオタクであったが、自身の豊富なオタク的知識を、作品内でセンス良く表現して秀作を世に送り出し、一流の「クリエイター」となったのである。

おわりに

日本のアニメは物語のなかで、登場人物たちのかけがえのない一回限りの人生を描き、リアリティを増し、メッセージ性を高めるため、ときには「性」「暴力」「死」

などの、明らかにどぎつい表現方法を使用する。アニメやマンガ・ゲームなどのサブカルチャーの位置付けは、2020年開催予定の東京オリンピックで日本への注目が集まるなか、日本発のコンテンツとして重要視されている。アニメも「非文字資料」であり、専門学会が立ち上がり、研究が行われている。アニメでは日本独自の常民的思想・生命観が反映されていることも多い。例えば、宮崎アニメの「もののけ姫」や近年の「妖怪ウォッチ」などの妖怪の世界をテーマにした作品は、学術的な考察が可能であろう。アニメやマンガなどのサブカルチャーは、非文字資料研究センターとしても無視できない研究対象だと考える。

1 中森明夫「僕が『おたく』の名付け親になった事情」『おたくの本別冊宝島104』(宝島社、1989)。他に東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』(講談社、2008)が詳しい。

2 守如子『女はボルノを読む—女性の性欲とフェミニズム』(青弓社、2010)